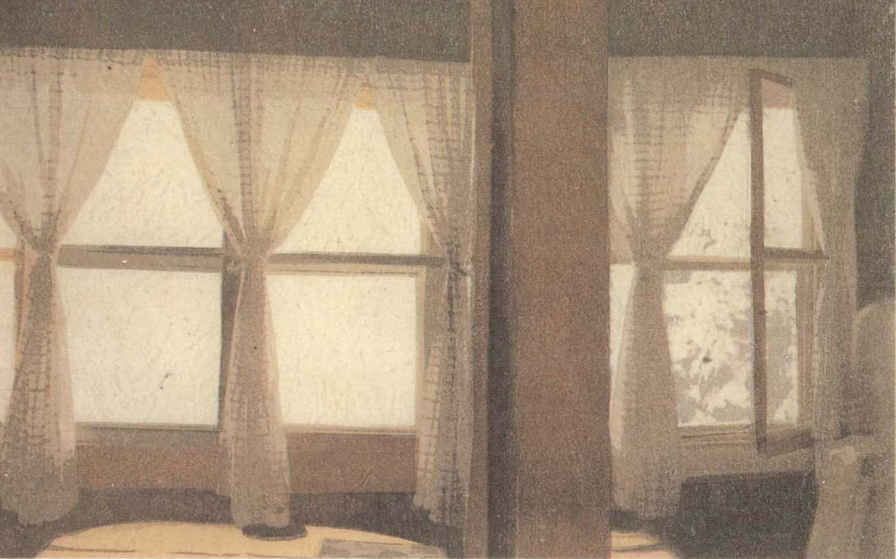




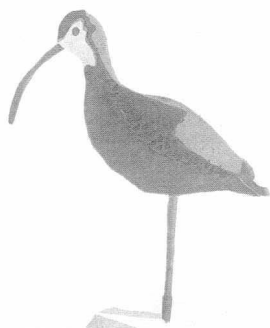
望 郷

三浦朱門

新潮社

望郷

三浦朱門



新潮社



ISBN4-10-320806-6 C0093

© Syumon Miura, 1987, Printed in Japan

望郷
ぼくろ

一九八七年八月一〇日 印刷
一九八七年八月一五日 発行

定価 一二〇〇円

著者 三浦朱門
みうらしゅもん

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一

電話 業務部(03)二六六—五一—
編集部(03)二六六—五四—

郵便番号 一六二

振替東京四—八〇八

印刷所 二光印刷株式会社

製本所 加藤製本株式会社

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信
係宛御送付下さい。送料小社負担にてお
取替えいたします。

望郷／もくじ

第一章	マニラの桜		5
-----	-------	-------	---

第二章	ジョイント・ベンチャー		67
-----	-------------	-------	----

第三章	オランウータン		131
-----	---------	-------	-----

第四章	浮き藻		185
-----	-----	-------	-----

装画
二
関
恵
美

望

鄉

第一章

マニラの桜

ギャバジンという生地の名を知っている人がいれば、その人はきっと戦後の一時期の着るものもなかった時代にこの名前を覚えてたのだ。

元来はウールの目のつんだ綾織りのことで、今でもレインコートや、丈夫でさえあればという替えズボンなどに、また制服に準ずるスーツなどに使う。しかし今ではこの織りを見てギャバジンという単語を使う人はほとんどいなくなる。しかし戦後の一時期には憧れの生地であった。

浩はギャバジンのコートを買うために娼婦になった女を知っている。小学校で姉の同級生だった君子である。

戦争に負けた時に浩は十九歳で、帝国陸軍が最後に徴集した兵士として埼玉県にいた。都市にあった兵舎は空襲で焼きつくされていて、浩たちは戦前は農林省の米の倉庫だったという窓のない建物を兵舎に代用していた。入隊したのが、八月一日だったから、彼の軍隊経験というと、窓のない兵舎で過ごした暑苦しい記憶が先にたつ。幸い新兵ばかりの部隊で、数名の召集された老

古参兵が一生懸命に軍隊らしくしようと、新兵をなぐっていたが、古参兵一人に新兵は二三十人もおり、殴る拳の方が腫れあがることになるので、古参兵も手抜きをせざるをえなかった。

杉並区にあった家に帰ると、浩は家族で一番、買い出しに熱心な人間ということになった。姉一人、妹一人の三人同胞きょうだいであつたから、たつた一人の男としていくらか責任を感じている点もあつたが、それよりも軍隊での食料不足と農家出身の同僚の、今年是不作だという意見が身にしみていたのである。

買い出しの目的地は中学の初年級まで住んでいた国分寺であつた。軍隊はなるべく同一地域の出身者で部隊を編制するから、必ずしも偶然とは言えないが、小学校の同級生の関が同じ中隊にいた。彼は農家の出のくせに、体力がない上に要領も悪かつたから、数少ない古参兵が新兵の見せしめのために殴るモデルになっていた。浩も坊ちゃん育ちの学生兵士で、軍隊を要領よく生きて行く才能などはなかつたが、関をかばおうと努力する程度の余裕はあつた。その気持ちを通じたのか、八月二十日に除隊する際に、関は軍隊からもらつた食料を、自分は農家だからと、毛布と引換えに浩にくれた。軍服や靴も欲しそうな顔をしたが、浩も裸で帰ることもできないので、帰つたらきつと軍服と軍靴は食料と交換に行くからと、関とは臨時の兵営であつた倉庫の戸口で別れた。浩は部隊の雑務をさせられて、同僚より一週間後れて復員したのだ。

軍服を関にやる、といつても食料と交換となると、当時の力関係から浩が軍服を届けに行かねばならない。食料は統制物資で見つかれば没収されるし、大量なら刑事犯になる時代だつた。

洗つた軍服と軍靴をリュックサックにいれて、浩は学生服を着て関の家に行った。このあたりは富士山の噴火による火山灰が堆積してできた関東ローム層という赤土の上に、数百年間の腐食

土が堆積した土地がらだから、水田はない。麦、芋、蔬菜、養蚕によって生活してきた農家である。秋の始めだったから、浩はさつま芋をもらおうと思ったのだ。

行ってみると浩の学生服姿は関家では歓迎された。学生は社会の寄生虫という見方がある時代で、反感を買う恐れもあったのに、彼は小学校では秀才だったので、彼への敬意は関の家族に残っていたのである。もっとも、新聞もとらないような農家の子弟の中に入れば、都会のインテリの子は大抵秀才になってしまうのである。関の一家は浩を懐かしんでくれただけでなく、軍隊で関をかばい、彼のような秀才が芋を買い歩いていることについて、大変に感傷的になってくれた。つまり、学生服で行ったことは大成功であったのだ。

それから浩は国分寺に買い出しに行く時は学生服にしたが、敗戦の翌年の秋、関の家の物置に間借り人が住むようになったことを知った。それが君子だった。彼女が関の遠縁であることは、その時に始めて教えられた。君子の家は農家ではなく、浩などはポンプ屋と呼んでいた。どうやら昭和の初期の不景気で潰れた農家であつたらしい。それでも彼女は実科女学校という実業高校に相当する学校を出た。当時の進学率から考えると、今の大学進学に当たるだろうか。

戦時中、君子は工場に動員されて事務をしていた。工場は小銃を作っていて、戦後は電気パン焼き器など家庭用品の製造に切り換えて再生を目指したが、そんなことでは戦時中に膨れあがった社員を養うことはできず、潰れてしまった。結局、敗戦後、一年ほどしてから、君子は会社からほうりだされたのである。関から聞いたかぎりでは、彼女の父は戦死、工場の炊事婦だった母親は空襲で爆死、という風に親には早く死に別れた。兄たちはいたが、自分の生活に精一杯で、とても君子の面倒は見られない。

君子は国分寺の駅前で靴磨きをしていた。もつとも浩は彼女が働いているのを見たことはない。靴磨きの女は頭を布で包んでいたから、顔が見えにくかったし、君子も浩から顔を背けていたかもしれない。

関の家に買い出しに行く途中で君子に会ったことがあった。もこもこの外套を着ていたから、冬のことだ。お盆に目鼻のような君子を見て、この顔ならたとえ関の家に間借りしていることを知らなくとも、一目で彼女と分かると浩は思った。浩の記憶にある子供のころの顔と同じだったのである。君子は姉の親しい友達で、浩も一緒にままごとなどをしたことがある。

「お久しぶりです」

浩は大人びた挨拶をした。君子はオーバーこそ陸軍の兵士の外套を、仕立直して染めたものであったが、当時まだ貴重品だったナイロンのストッキングをはいていたから、レディとしての敬意を払った。

「よく関んちに買い出しに来てんだってね。梓さん元気？ 今、何してるの」

梓というのは浩の姉の名前である。連れ立って関の家に行ったが、母屋には人のいる気配はしなかった。農閑期だから、誰かはいると期待していた浩は当てが外れて、どうしようか迷っていると、君子が、

「あたしんとこで待ったら」

と言ってくれた。あたしんとこというのは、農具小屋の一隅の六畳ほどの板の間で、板壁によせて、僅かな炊事道具や衣類を積みあげてあった。君子は外套を脱ぐと下はよれよれの工場の作業衣だった。ナイロンの靴下が見えたから、スカートをはいいているとばかり思っていたが、ズボ

ンをたくしあげて、外套の下に隠していたのだ。

君子のおしゃれはやつの思いで手にいれたナイロンのストッキング一足だけで、後は戦時中の配給しか着るものがない様子だった。戦後買った物と言えば、軍隊の外套だが、これは関から手にいれたのであろう。

彼女の作業服のステイプル・ファイバー、略してスフといった人造繊維はまったく酷いもので、生地としての腰もなにもなく、濡れた紙のように垂れ下がり、風が吹くとひらひらとなびくのだった。オーバーの下には女らしい服を着ているように見える君子の貧しさが哀れで、浩は彼女と会ったことは梓には言うまいと決心した。彼女はちよつと意地悪なところがあつて、そういう話を聞くと心からおかしそうに笑うのである。笑ひものにするには、君子は哀れすぎた。

それなのに当人は平気で、生活が苦しいので、進駐軍の家族がふえるらしいから、調達庁が募集しているメイドの試験に応募するつもりだと言つた。現在は靴磨きをしているとまでは打ち明けなかったが、「今の仕事」は寒さに向かつて、辛いからやめにすると言ひ、

「進駐軍のギャバジンのコートが欲しいわ。それからロングスカートも」

進駐軍といつても、軍用品ではなく、当時は米国のものは、大抵、進駐軍の物、という言ひかたをしたのである。ロングスカートというのは、どういう訳か、明るい色のタータン・チェックのフレアスカートがやたらに流行して、と言つても、そんな流行を追えるのはパンパンといった米軍相手の娼婦が中心で、彼女らはそれをウエストからヒップにかけては体の線が出るようにピタリ仕立て、裾は腰巻の長さのフレアにして着ていた。一寸、スパニッシュ・ダンスの衣裳のようではあつたが、着ている女たちが脚の短い、腰の貧弱な大和撫子だから、見ていてわびしい

気持ちになることが多かった。

ギャバジンは米兵の夏の軍服が、綿と化繊の混紡のギャバジンだったことから、スフヤもこもこした綿製品を見慣れた日本人には、いかにもキリッとしたスマートな生地のように思えたのだ。たとえば米軍関係の仕事をしている日本人はヤミ屋を含めて、紺のギャバジンのダブルの背広を着ていた。言い合わせたように紺だったのは、カーキ色の軍服地を横流ししても、紺にしかならなかったものであろう。

やがて君子は関の離れから姿を消した。関も彼女のことは言わなかったし、浩としても彼女を話題にするほどの関心はなかった。

今の銀座の和光は当時米軍に接収されていて、彼らのデパートになっていた。これをポスト・エクステンジ、略して、PXと言い、その前は米兵の溜り場だった。焼けた銀座の中でこのビルだけが使い物になる状態だったのであろう。

春先だった。敗戦から四年ほどたつと、バラックではあるが、銀座の家並みは一応は復興していた。地下鉄に乗ろうとした浩は、そこで米兵に抱き寄せられている君子を見た。彼女は憧れのロングスカートを着ていたし、肩から下が大きくひろがって、修道僧のマントのような、ギャバジンのコートを羽織っていた。彼女はついに目的を果たしたのだ。メイドの採用試験に落ちたのか、パスしても、兵士に誘惑されたのか、とにかく君子がパンパンになったことは疑いなかった。

二

浩が次にギャバジンのコートについての話題にかかったのは、敗戦後十年以上たってからだ

った。

大学を出た浩は製薬会社に勤めた。戦前は衛生薬品や試薬を作る日本衛生試薬と言う会社だったが、戦後は新日本製薬、略称はS N製薬と改名した。業界での規模としては二流で、戦時中は無水アルコール、蒸溜水、グリセリンなどの衛生資材を軍に納入していたが、浩が入社したころは配給の玉蜀黍の粉などでパンを焼くふくらし粉や、女性用のクリームなどを作っていた。会社は朝鮮戦争がはじまると衛生資材の注文を米軍から受け、そのコネで日本では比較的早い時期にベニシリンの製造に成功した。それを踏台に大衆薬品の分野にも進出して、昭和の三十年代には一流の仲間入りをして、浩を東南アジアに駐在員として派遣する程度の力を付けるようになった。当初、浩はオフィスを香港においた。ここには東南アジア全域に知られている、ドラゴン印の塗薬の工場がある。その主な材料のグリセリンを買ってもらったのが、彼の最初の成功であった。彼がマニラに行ったのは、包帯の工場を作る計画をしている米人がいると聞いて、消毒技術について、食い込める余地がありはしないかと、紹介状を本社からもらって、フィリピンに飛んだのであった。

その米人はコンウェイといったが、本社から紹介状が送られてきたのも道理で、彼は長い間、日本の占領軍の一員として東京にいたし、朝鮮戦争が勃発すると、衛生資材の調達に日本の業者と接触した衛生部の高級将校であり、大学で薬学を専攻して、戦時中に軍に入った男だった。辞めた時は佐官になっていたが、プロの軍人になる意思は最初からなかったのだし、占領軍の高級将校時代に受けた日本の業者からの賄賂を貯めた資本で、フィリピン軍に衛生資材を納入する会社を作ったのだった。

コンウエイは片言の日本語を覚えていた。

「シャチョさんの上野さん、カチョさんでしたね。一緒によくアタミにいました。とてもありがとございました」

日本語を覚えているのも道理で、彼の夫人は日本人だった。紹介状と一緒に送られてきた資料によると、

奈緒子夫人はコンウエイが接收して住んでいた家屋の持主の前夫人。昭和二十三年ころ日本人の前夫と離婚。昭和二十四年、コンウエイ中佐と再婚。良家の出。

とあった。それで香港にある日本食品ならマニラでも手に入るとは思ったが、特に塩鮭と昆布などを日本から送らせ、それを土産に浩はマニラに行った。その直前に着任した河田に持って来させた、茗荷と紫蘇の実と牛蒡を持っていたのが大成功だった。紹介状と手土産をもってコンウエイの事務所に行った翌日、自宅へ食事に招待されたのである。香港に赴任して間もなく浩も知ったのだが、東南アジアでは大抵の日本食品を売っていたが、難しいのが納豆、牛蒡、茗荷などであったのだ。河田の着任に際してそういう物を持ってこさせたのは、浩は自分に珍しいものなら、マニラへの土産になる、と考えたからである。

かつての米人居住区の名残なのか、マニラ市内には、高い塀で囲まれた高級住宅区が幾つかあり、コンウエイの家もその一つにあった。塀の入り口には警官に似た服装の、拳銃で武装した守衛がいるが、一度、塀の中に入ってしまうと、開放的な住宅が並んでいた。そうはいっても、よ

く見ると大きいガラスには、裝飾的に見えてはいても、蔦をデザインした鉄の格子があつて、泥棒がガラスを破つて侵入しないような配慮がなされていた。浩は将来、マニラに住む時は、治安については十二分に注意しなければならないと思つた。

奈緒子コンウェイは良家の出、と資料にあつた通り、品のよい、美しい人だつた。三十代の半ばで浩と同年配に見えたが、戦時中に日本人と結婚して子供をもうけているから、實際は四十を過ぎてゐるのかもしれない。若いというよりも、年を感じさせない女性の魅力をもつていた。

「有難うございます。茗荷を持つてきて下さる方つてなかなかいらつしやらないの。まして牛蒡となると、ほんとに国を出てから始めてじゃないかしら」

奈緒子はそういうことを達者な英語で言い、コンウェイもうなずいて、

「私は南部のルイジアナの出身だが、糖蜜をたっぷり使つた豚肉の料理が食べたい。そういう料理を作る黒人の軍曹の女房がいるが、時々、そこに食事に呼んでもらう」

黒人の家の客になることがいかに特別のことであるか、という証拠のつもりだろうか、ニュー・オルリーonzのバスや市電は黒人と白人の席は別になっている、といったことを教えてくれた。

日本の長距離列車と同じボックス式座席の背板に刻みがあつて、板を差し込んで通路を仕切る構造になっている。板は黒人の客が多くなれば、白人側に移動し、白人が多くなれば黒人側に移動させることができるが、とにかく白と黒は乗降口も違えば、車内で同席することもない。占領下の日本にも進駐軍専用車というのがあつて、敗戦国民は肋骨が折れるほど車輦に詰め込まれていたのに、米人はガラガラに空いてシートも新しい車輦で、ゆっくり脚を組んで坐れたのだ。コ